



TITLE:

京大広報 No. 256

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 256. 京大広報 1983, 256: 385-388

ISSUE DATE:

1983-06-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209430>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 256

京都大学広報委員会



可視化したジェット気流パターンのシミュレーション —関連記事本文 386 ページ—

(日本上空で一年を通じ吹いている強い西風は蛇行しながら、ほぼ10日間で地球を一)周する。これは、地球が自転していることと、南北に気温の差があることによる。)

目 次

5月27日の現場検証.....	386	日誌.....	387
<紹介>		<随想>	
教養部・地学教室.....	386	滞留日誌抄	名誉教授 遠藤嘉基..... 388
計報.....	387		

<大学の動き>

5月27日の現場検証

5月27日(金)未明、事務局本館の窓ガラス10枚が投石により破壊された。これに関して、警察へ

被害の届出が行なわれ、警察の現場検証が本学関係者立会いの上、同日午前9時30分頃から同10時10分頃まで行なわれた。

<紹介>

教養部・地学教室

教育と研究を真に両立させることは大変難しい、と多くの教官は感じているはずである。地学教室も例にもれない。地学の取り扱う分野は、百億光年以上の宇宙の果てから、数百万気圧の地球の中心まで、宇宙空間・惑星間空間・磁気圏・電離圏・大気圏・水圏・岩石圏・地球内部等々におよぶ。最近の宇宙科学や地球科学の進歩には眼を見張らせるものがある。宇宙創世期のビッグバン、太陽系の起源、探査衛星によって明らかになった木星・土星等の数々の新事実、太陽ニュートリノの謎、オーロラの発生機構、成層圏突然昇温、赤道風の26ヶ月周期振動、エル・ニーニョ^{注1)}と異常気象、海洋での中規模循環、海洋底プレートの移動、伊豆半島の日本列島への衝突、東海沖地震発生説、西南日本における付加テクトニクス^{注2)}、島弧や大陸縁辺部における特徴的な火山活動等々、新しい学説や発見が続出し思いつくまに並べても限りが無い。科学雑誌ブームのせいか、毎年入学してくる学生諸君の好奇心も多様である。上述の新しい学説や発見を直ちに一般教養として講義に反映させることは至難の業といえよう。

学会は耳学問の貴重な場でもある。しかし、一方では、研究者の評価は学会活動においてのみなされるという冷厳な慣習も確かである。毎年、春と秋の学会、その間にいくつかのシンポジウムや研究会、これらが遠慮なく押し寄せてくる。講義の合い間をぬっての講演準備。やはり研究と教育の両立は大変である。

現在の地学教室の構成は、教授1、助教授3、助手2である。それぞれの研究分野は、地球内部

物理学、岩石学、鉱物学、地球内部電磁気学、地球化学、海洋学と多岐にわたる。

次に、それぞれの現在の研究テーマを要約する。

1) 高温高压下での弾性波速度の測定——これは、上部マントルに存在する低速度層の成因解明や火山基部のマグマ溜りの性質を明らかにしようとしている。

2) 火山岩の同位体比測定——西南日本弧^{注3)}の火山岩の成因を岩石学的・地球化学的手法から調べ、特に島弧発達史に重要な役割をするカルクアルカリ安山岩の由来を明らかにしようとしている。

3) X線結晶構造解析——地殻・マントルを構成する珪酸塩鉱物の原子の位置や陽イオン席の占有状態を調べ、地球科学上の鉱物の挙動を明らかにしようとしている。

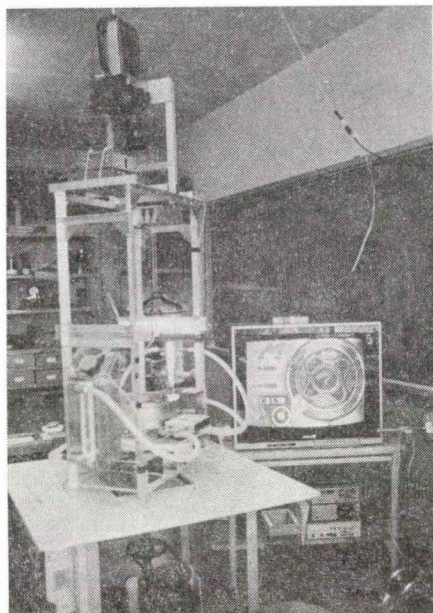
4) 地殻の電気伝導度——電磁誘導現象を利用して、地殻内、特に活断層破碎帯の電気伝導度構造を明らかにしたり、地殻内応力変化に伴う電気伝導度の時間的変化を監視し地震予知への応用を試みている。

5) 火山岩中の微量成分の分配——火山岩類の化学組成、特に微量成分の分配の仕方を放射化分析法により決定し、マグマの発生からその進化過程を明らかにしようとしている。

6) 北極海の循環と熱収支——北極海での海水の循環と極氷との相互作用および熱収支について、数値モデルによるシミュレーションを行ない、気候変動に果す北極海の役割を調べている。

研究成果の一部は、地学教室で毎年1回刊行している雑誌『九十九地学』(つくもちがく)に発表している。本年で第17号を数える。雑誌名の由来は、比叡山から流れ出て、本学の位置する扇状

地を形成した白川の白が「百」よりひとつ少ないことをもじって命名したとか。



ジェット気流の実験装置

教育面では、週7コマの講義はもちろんのことながら、週5コマの地学実験にも力を入れている。これらの実験は、岩石・鉱物・化石・野外観察等の地質学から、天文・気象・海洋・地球電磁気・地震・測地・地球内部物性・物理探鉱にいたるまで多分野にわたり、教科書等から得る知識と実際に体を使つての観測・実験との相違を認識させていて学生諸君にも好評のようである。表紙写真は、地球自転と南北の温度差効果によるジェット気流の蛇行を確かめる実験で装置はほとんど手造りである。もっとも、このような多分野の指導は地学教室のスタッフだけでは到底カバーできない。多くの非常勤講師の方々の御協力を仰いでいることを付言して紹介を終る。

注1) ペルー沖の湧昇域の水温の異常上昇のこと（この結果、カタクチイワシなどの漁獲量が減少する現象）。

注2) 大陸縁辺部が海域にあった巨大な地塊の到来、付加、回転などによって姿を変えていく過程。

注3) 日本弧のフォッサマグナより以西の部分をいう。（教養部）

計報

池田 峰夫（工学部教授・理学博士）

5月27日逝去，57歳。本学理学部卒。昭和41年本学工学部教授就任。専門は応用数学，微分幾何学，相対論。

泉井久之助（本学名誉教授・文学博士）

5月28日逝去，77歳。本学文学部卒。昭和22年本学文学部教授就任，同44年退官。その間附属図書館長（昭和24年～32年），評議員（昭和33年～35年）を歴任。昭和50年勲二等瑞宝章受章。専門は言語学。

木村 廉（本学名誉教授・医学博士）

5月28日逝去，89歳。本学医学部卒。昭和3年本学医学部教授就任，同31年退官。その間評議員（昭和17年～19年），医学部長（昭和19年～23年），ウイルス研究所長（昭和31年）を歴任。昭和41年勲二等瑞宝章受章。専門は微生物学，免疫学。

原田 幸子（医学部附属病院看護部技官）

6月7日逝去，57歳。昭和44年から医学部附属病院勤務。

日誌 (1983年5月1日～5月31日)

5月6日 大学院審議会
7日 総長，メキシコ合衆国 Guadalajara 大学との学術交流に関する覚書交換及び高等教育・研究機関の視察のため，同国並びにペルー共和国，ブラジル連邦共和国及びアメリカ合衆国を訪問（22日まで）
10日 発明審議委員会
13日 木村研究所公開講演会
16日 中華人民共和国中国社会科学院訪日代表团団長 馬 洪院長外7名来学，総長事務代理及び関係教官と懇談並びに学内施設見学

18日 国際交流委員会
23日 数理解析研究所創立20周年記念式典及び記念講演会，記念シンポジウム（24・25日）
ク オーストラリア連邦 New South Wales 大学 Raymond M. Golding 副学長来学，総長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学
24日 評議会
ク 保健衛生委員会
28日 学位授与式
31日 安全委員会

